

福岡県近世古窯跡研究の流れ

副島 邦弘

(1)

当県の近世古窯跡の研究は筑前国焼高取焼の研究から発する。大正年間に中山平次郎博士が考古学的な調査研究をなされ、これが近世古窯跡研究の端緒となっている。

博士は、貝原益軒の『筑前国統風土記』からヒントを得て、現地の踏査を行って、遺物の採集と窯跡の位置を発見している。

この成果は、大正4年(1918)2月考古学雑誌の誌上を飾っている。これ以後三部作が考古学雑誌上で高取焼を論究している。

「高取焼最古の二古窯跡と其遺物」(考古学雑誌五卷六号)

「筑前国犬鳴谷に於ける高原五郎七の製陶所址」(考古学雑誌五卷八号)

「筑前国嘉穂郡白旗山麓の高取焼窯址」(考古学雑誌五卷十号)

を論述されている。

高取焼が永満寺宅間に起り、内ヶ磯そして白旗山へ移窯したのは燃料の逐次的欠乏と考えられている。

その後は考古学的な実証から離れて、伝世品による骨董の世界に埋没することとなった。

その中であって、陶磁器研究は美術的なもの、鑑定を中心とすることから陶片研究がなされ、昭和にはいって、中山博士と同じ線上での研究は、須恵焼の許斐友次郎、筑後陶では浅野陽吉、高取・上野焼の小野賢一郎・栃内礼次・金原京一・美和弥之助・井上圓蔵・奥村次八郎・佐藤進三等が上げられる。

かれらはその研究した成果を、雑誌『茶わん』・『やきもの趣味』・『陶磁』等の誌上で発表している。

筑前の磁器須恵焼については、昭和7年(1932)7月に「筑前名陶須恵焼に就て」許斐友次郎が『都久志』第五号に、創業から終煙まで述べている。

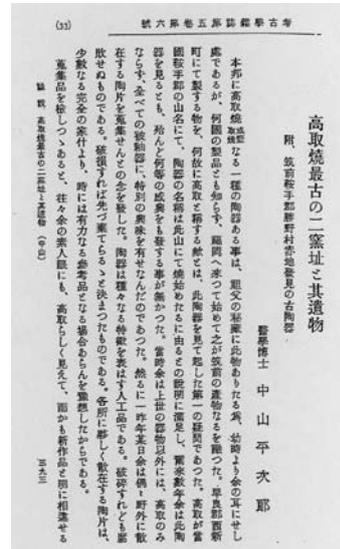
また浅野陽吉は昭和10年(1935)9月に筑後の国の陶磁器について集大成して『筑後陶磁考』を発表している。これは佐賀県における中島浩気の『肥前陶磁史考』より一年早く刊行されている。いわゆる筑後国の『陶磁史考』とでも言うてよいものであった。

高取焼の研究については、小野賢一郎が『茶わん』第67号に「高取歴代記録」を発表している。

奥村次八郎氏の写本のもので、小石原鼓の高取家の文書ではない。同じく小野は昭和12年(1937)『陶器全集』第31号に「高取歴代記録」を詳細に紹介している。

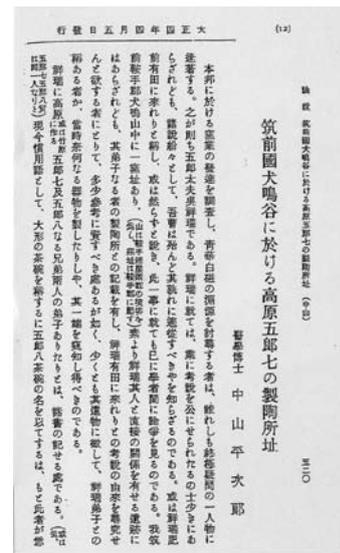
高取焼最古の二古窯跡と其遺物

(考古学雑誌五卷六号)



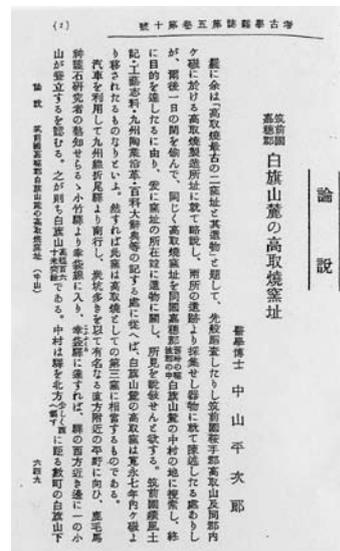
筑前国犬鳴谷に於ける高原五郎七の製陶所址

(考古学雑誌五卷八号)



筑前国嘉穂郡白旗山麓の高取焼窯址

(考古学雑誌五卷十号)



後年鼓の高取家にあった「高取歴代記録」を、高取静山の手によって昭和54年1月に『高取家文書』として刊行されている。

また小野と同時期栃内礼次はこの「歴代記録」の記事に着目して、古高取の窯跡を新たに発見している。これが山田窯である。これを調査した結果を自費出版したのが『古高取山田窯』である。この時の遺物については若干のものは根津美術館に残っている。

雑誌『陶磁』の中で、高取・上野関係の記事を抜き出してみると次の様になる。

(高取焼関係では) 小山富士夫「続旅襍記」十二巻一号
冠首写真で高取の茶入

(上野焼関係では) 宮本謙吾「八代焼に就いて」四巻六号

の二本のみで、高取焼のことについては、小山富士夫のものは旅行の紀行文であった。

昭和15年(1940)には『茶わん』第百九号に武田勘治が「古高取窯の遺跡」としてまとめている。

一方、上野焼の研究は、井上圓蔵・美和弥之助によって、昭和17年(1942)『豊前上野焼研究』(註1)として集大成されている。これは井上の『やきもの趣味』の誌上で発表されていた上野焼の研究の集約でもあった。美和は「茶会記に現れたる上野焼」として、古文書を中心に茶会記を繙いている。彼は古くから窯芸美術文化研究所の編輯顧問でもあった。

この『豊前上野焼研究』が戦前の福岡県における近世古窯跡研究の最後の結晶である。

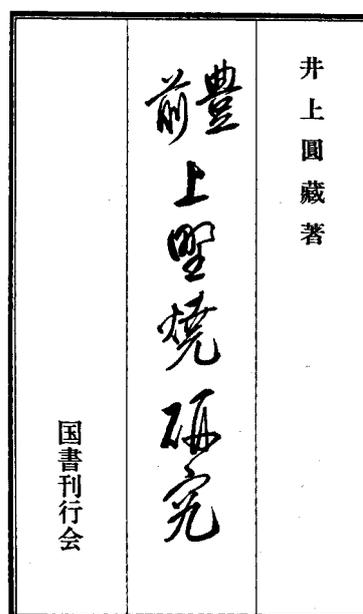
(2)

日本は太平洋戦争に敗北したことによって、これまでの皇国史観はくずれ、民主的な歴史観すなわち実証的な史学方法論がもたらされ、考古学研究が脚光を浴びることとなった。戦後の歴史研究は考古学からといっても過言ではない。

しかしながら、敗戦によって美術品・歴史的資料・骨董品等の海外流出は戦後の時期の特徴であった。このことは幕末から明治維新にかけての一時期同じことを呈していた。

そのために、昭和25年(1950)には、文化財保護法の制定があり、文化財の海外流出に歯止め作り上げた。

昭和30年(1955)、朝鮮戦争の特需景気というものによって、経済復興がなされ、世間では「もはや戦後ではない。」という言葉が交わされ、生活水準が戦争前の昭和11年頃に復した時でもあった。



註1

井上圓蔵・美和弥之助
『豊前上野焼研究』
1942年、復刻版 1982年

この年こそ、福岡県における近世陶器研究の戦後の幕開けともいえるわけで、三上次男博士を団長とし、佐藤進三・曾野寿彦・福岡県側から文化財担当の筑紫豊・原田大六等と地元の田川市・赤池町（現福智町）の文化人・窯元が中心となり、日本陶磁協会が主体となって、赤池町の上野釜の口窯跡で考古学の発掘調査が行なわれた。（註2）

それによると窯本体の全貌を検出されたことは、当時の陶芸史上で画期的な学術調査でもあった。これには戦前の上野焼研究が基礎となっていたことは言える。

考古学上でも近世陶器窯跡を発掘することにおいても同様であり、これが戦後の研究での第一歩であった。

文化財保護法は昭和29年（1954）に一部改正され、発掘調査を実施する場合、届出することが制度化されたわけで、戦前のように物原の一部のみを発掘する行為は遺跡を破壊することにつながることであり、これを規制するために改正を行なったわけである。

この上野釜の口窯跡の発掘調査の結果は『陶説』33号等に概要報告がなされている。

それによると、窯本体は全長41.5m、焼成室の数は焚口と窯尻を入れて17室で、窯の傾斜角度は19度で比高差は14.3mである。窯の構造は半地下式階段状連房の登窯であった。しかしながら正式な発掘調査報告書は公刊されていないのが残念である。

この発掘調査が契機となって、当時の若き陶芸家による陶片研究が盛んに行われ、高取焼の原点であった宅間・内ヶ磯の陶片による古高取の研究が行われる一方で、心ない一部の人々による盗乱掘が進み遺跡の旧地形が変化するほどになっていった。

昭和40年代（1965～）の高度経済成長はこの九州の地にも波及し、九州縦貫自動車・山陽新幹線建設・大規模宅地造成等の国土開発計画によって、都市部からその周辺部にも押し寄せてきたわけである。

昭和41年（1966）には、戦前に小山富士夫氏の『陶磁』の紀行文で詳細に説明されていた飯塚市幸袋の白旗山の麓で静かに眠っていた高取焼の創始者である八山（和名高取八蔵）一統の墓所が市営住宅建設の為、改葬された。現在その地には、飯塚市によって石碑と説明板が建てられている。（註3）

世間で話題になったのは、古唐津・古上野といわれていた逸品が、高取の内ヶ磯窯跡のものと同定されたことが話題となった。このためなお一層好嗜家達によって荒らされる結果となっている。

昭和42年（1967）には高取焼発祥の窯である宅間窯跡が直方市永満寺から赤池町上野皿山への市道拡張工事によって窯跡の物原部が破壊された。10年後の昭和52年（1977）に側溝

註2

日本陶磁協会刊

『上野古窯調査報告書』陶説7 1955年 陶説に報告されたものをまとめたもので発掘調査の折りの資料は出ていない。



註3

副島邦弘

「飯塚市幸袋高取家墓所
出土の遺物について」
『古高取内ヶ磯窯跡』
直方市文化財調査報告書
第四集 1982年に詳しい。

工事及び、舗装工事等が実施され、後年平成 17 年には 2 車線から 4 車線にするため山際に線引きがなされ、県道へ格上げすることとなった。これに対して文化財側の対応のまずさが表面化し、こんな中で、水資源開発の福智山溪にダム建設が計画されるにいたって、福岡県・直方市当局は文化財側によって古高取内ヶ磯窯跡の 3 ケ年の継続調査が昭和 54 年（1979）から国庫補助によって実施されることとなり、これとの関連で、宅間窯跡の実態を明確にとらえることが必要となり、旧地形の破壊が進んでいることから現況の調査の地形測量調査を実施した。これによって窯本体の位置の把握ができ、翌年の昭和 57 年（1982）に国庫補助を受けて、直方市教育委員会が内ヶ磯窯跡に引続き実施した。

この発掘調査によって、焚口から窯尻まで焼成室 6 室と焚口 1 室の全長 16.60m の割竹型の登窯（註 4）を検出している。県道への格上げの折の調査には、この窯の周辺部に位置するため、工房跡・屋敷跡の検出が考慮されるわけである。丁寧な調査が必要となってくる。

古高取の第二期の窯である内ヶ磯窯跡は、好嗜家や窯元達の中で、早くから知見せられていた。盗乱掘が物原部にはいつていた。

前述のごとく、昭和 46 年（1973）に治水開発のために福智山ダム建設が計画がなされ、昭和 50 年（1975）福岡県教育委員会・直方市教育委員会及び関係部局との協議がなされ、3 ケ年計画の継続事業として昭和 54 年より実施することとなり、54 年から 56 年まで実施した。窯本体を中心に工房跡等が検出され一応の成果を上げた。窯跡本体は削平されることなく水没するわけで、窯本体を残すための手当が必要となってくるわけで、この問題を原因者負担で調査を行なう平成の発掘調査となった。

発掘調査は、平成 7 年（1995）から平成 11 年（1998）にかけて実施された。所謂全面的な発掘調査となり、調査報告書が平成 12 年（1999）から平成 14 年（2001）にかけて 3 冊に分けて報告されている。この内ヶ磯窯跡の調査報告書は直方市教育委員会 3 冊・県教委が 3 冊の計 6 冊を数え、窯本体は保存処置を実施して、百年の眠りにについている。（註 5）

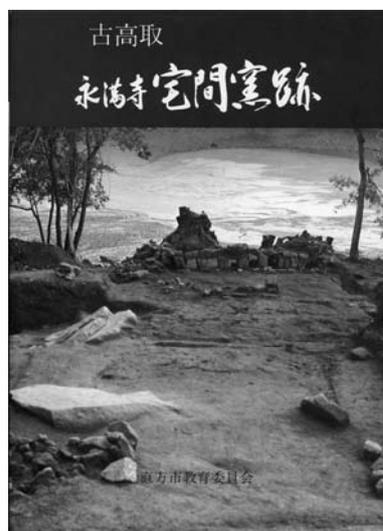
また若宮町（現宮若市）の犬鳴焼の窯跡についても、山陽新幹線の福岡トンネル工事に伴う工事用道路のために、焚口部分が削平されていた。昭和 61～63 年（1986～1989）にかけて犬鳴焼の窯跡の調査が実施された結果、窯跡は 2 基あって犬鳴川をはさんで、東・西に 1 基ずつ検出され、両窯跡とも、半地下式の割竹型階段状連房の登窯であった。（註 6）

1 号窯の方が残存具合はよくて、焚口部分は削平されているが、その大半は残っていた。

註 4

副島邦弘・伊藤晴明・時枝克安他

『古高取永満寺宅間窯跡』
直方市文化財調査報告書
第五集 1982 年
直方市教育委員会



註 5

内ヶ磯窯跡の調査は全域発掘調査を実施し、窯本体・物原部・工房跡等の発掘によって全てを把握することができた。

詳細には福岡県教委の調査報告書を参照にされたい。

・岸本圭編『内ヶ磯窯跡 1』
福岡県文化財調査報告書
第一六三集 2001 年
福岡県教育委員会

・岸本圭編『内ヶ磯窯跡 2』
福岡県文化財調査報告書
第一七〇集 2002 年
福岡県教育委員会

・岸本圭・大庭孝夫編
『内ヶ磯窯跡 3』
福岡県調査報告書
第一八一集 2003 年
福岡県教育委員会

註 6

・副島邦弘・馬田弘稔編
『犬鳴Ⅱ』
福岡県調査報告書
第九四集 1982 年
福岡県教育委員会

2号窯は大半が削平され2室のみが残っていた。その他の遺構の屋敷・工房等の検出はみられなかった。

皮肉なことにダム建設によって水没する運命となるものが出てきたわけで、山懐にいだかれた位置に存在するこれらの窯跡はただ削平されて消滅するのではなくて、水没することとなり、永く日の目を見ないこととなった。

筑前の国で磁器を焼いた藩窯である粕屋郡須恵焼窯跡は、昭和55年(1980)に県指定史跡となっている。須恵町歴史民俗資料館の常設展示の目玉として須恵焼の伝世品を見せている。昭和57年(1981)に企画展として『須恵焼』を取り上げ、より理解を深めている。

佐賀県西松浦郡有田町に、唐津・伊万里等の肥前陶磁器を中心に調査研究を実施する目的として、佐賀県立九州陶磁文化館が昭和55年(1980)に開館している。

昭和56年3月には、朝日新聞社が内ヶ磯古窯発掘記念として『大名茶陶展』を全国的な規模で実施された。高取焼の伝世品と発掘された陶片を比較できるように展示して、研究の便をはかった。この企画は筑前国焼高取の名を全国的に高めることとなった。

昭和57年(1982)に上野焼の開窯の窯である菜園場窯跡の発見と発掘が実施された。(註7)

北九州市小倉北区愛宕で、都市高速道の側道建設工事に伴って検出されたもので、一般に豊前国焼上野の発祥の窯であると言われている。この窯は古くから久我五千男・美和弥之助氏等が求めていた場所であった。昭和62年(1987)には福岡県指定文化財となっている。窯本体は約20mほど動いて移築されて、覆屋を建てて現状保存されており、見学は可能である。

筑後国の朝妻焼については久留米市教育委員会が窯跡の発掘調査を平成4年(1992)冬に行なっている。

また、筑前秋月藩の御用窯についても、窯の位置を押えることが秋月氏関係遺跡の調査の中で、昭和57年(1982)夏に甘木市教育委員会の手で実施されている。

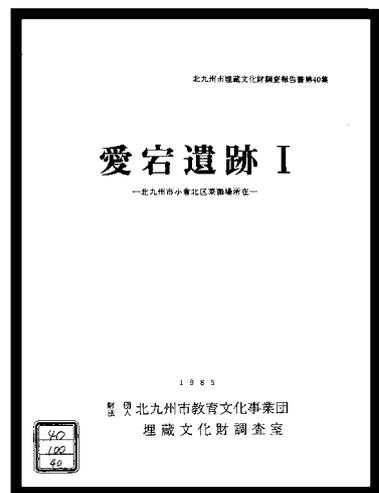
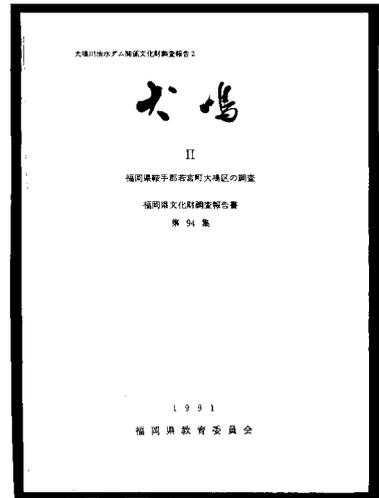
江戸期の個人窯については、宮若市(旧若宮町)の桑野家文書の『年代記』(註8)の中に、明和4年(1767)の条で、

—前略—当春より鞍手郡山口村百姓惣兵衛「と申者」屋舗以伊万里焼皿茶碗類焼出ス、所々より見物多シ—後略—

この一行の文書から、窯位置と遺物としての窯道具・陶片等の採集(註9)が行なわれた。

展覧会としては、九州陶磁文化館の昭和60年(1985)の企画展として『九州の茶陶展』として、上野・高取の茶入や茶碗等が出展されていた。福岡市美術館では、昭和61年(1986)の企画展として、高取を取り上げて『筑前国陶 高取焼展』を実施している。

また福岡県立美術館でも、翌年の昭和62年の企画として、



註7

上村佳典編『愛宕遺跡 I』
北九州市埋蔵文化財調査報告書 第四十集 1985年
北九州市教育文化事業団

註8

中村正夫・中村伝五郎編
「年代記」(桑野本)
『福岡県史(近世)』
1990年 西日本文化協会

註9

副島邦弘
「北部九州における近世古窯跡の研究—筑前国鞍手郡山口村(現宮若市山口)浅ヶ谷窯跡について—」
『九州歴史資料館研究論集』
24 1999年

豊前上野焼を取り上げて、『まぼろしの美古上野展』を開催している。窯ごとの出土陶片と伝世品が比較できる様に展示し、図録にも掲載されている。

上野・高取を企画展で取り上げた両展覧会は興味を引いた。その中では高取焼の内ヶ磯窯跡の出土遺物（陶片）は注目を浴びた。

平成元年（1989）に、根津美術館で『桃山の茶陶展』の中で、京都市内の遺跡から出土した桃山陶器と、ともに栃内礼次が採集されていた高取山田窯跡の陶片を公開された。

平成4年（1992）には、福岡県のやきものをまとめた展覧会が、九州陶磁文化館で『福岡の陶磁展』として実施され、高取焼の発掘資料が中心におかれ、豊前・筑後等のやきものが周辺を飾る結果となっていた。

発掘調査では、山田窯の後の第4番目にあたる様式的には遠州高取といわれる飯塚市幸袋の白旗山窯跡の発掘調査が昭和62年から3年間の継続調査で、3基の窯（註10）が検出されている。

昭和63年（1988）秋には、高取焼の系譜の中で、異なっているが、中山博士が記録（註11）されていた能古高取焼についても調査が実施された。この窯は磁器を中心に焼成した窯で高取の職人達からも影響を受けたものと考えられる。

この調査については福岡市教育委員会の手で行われた。窯の平面形は焚口がせまく順々に末広りの扇形を呈するもので、古上野・古高取には異なった形態である。筑前で磁器を焼いた須恵焼の新窯がこれにあたる。

福岡県下のやきものの里として名高い朝倉郡東峰村小石原では中野皿山の発掘調査が旧小石原村教育委員会の手で行なわれ、これが皮切となり、小石原中野上の原窯・中野火口谷・小石原一本杉窯・高取鼓釜床窯跡等（註12）と続き、小石原村（現東峰村）に埋蔵文化財の専門職員を入れて、村おこしの起爆剤となって、研究素材の提出もできてきている。

高取焼系の発掘調査は、大筋で実態が理解できるようになっている。白旗山・中野皿山・鼓・小石原窯跡群の調査などで、研究資料の公表がなされ、これを補完するために、平成にはいって、遠賀郡岡垣町上畑窯跡・鞍手郡宮田町（現宮若市）千石窯跡（註13）の発掘調査が実施され、より詳細なるデータが集められることが期待されたが、残存状態が悪く、残念な点が多かった。

平成17年（2005）に至って福岡市教育委員会の手で、高取焼の西皿山の物原部の調査がなされている。その実態が公表されるのが待たれる。

豊前国の上野焼の系譜の中で、後期上野と併行して19世紀初頭に焼かれた田香焼窯跡について、史跡整備のための発掘

註10

嶋田光一編
『遠州高取白旗山窯跡』
飯塚市文化財調査報告書
第十六集 1992年
飯塚市教育委員会

註11

田崎博之 『能古高取焼窯跡』
福岡市教育委員会 1988年
詳細なる報告書の刊行なし
市史跡として保存されている
もので、地震の為の環境整備
が本年（2006）実施されてい
る。能古博物館だよりを参照
のこと。

註12

旧小石原村教育委員会は
“村おこしの一環”として、
小石原村の近世古窯の発掘調
査を実施し調査報告書を刊行
している。
・児玉真一編
『中野上の原古窯跡概報』
小石原村文化財調査報告書
第一集 1988年
・児玉真一編
『中野火口谷一号古窯跡概報』
小石原文化財調査報告書
第二集 1989年
・児玉真一編
『中野上の原古窯跡』
小石原村文化財調査報告書
第三集 1990年
・日高正幸編
『一本杉古窯跡・金敷様裏一
号古窯跡概報』
小石原村文化財調査報告書
第四集 1993年
・日高正幸編
『鼓釜床一号古窯跡』
小石原村文化財調査報告書
第五号 1994年等に詳しい。

註13

上畑窯跡の調査の概要は
・中川潤次編『図録 岡垣の
文化財』岡垣町教育委員会
1996年に書かれている。
また千石窯跡の発掘調査に
ついては・吉田悦子編『千石
窯跡』宮田町文化財調査報告
書第五集 1995年に記述さ
れている。

調査がなされ、2基の窯跡が検出（註14）された。1号窯は焚口と焼成室と窯尻をもつもので、全長15m前後を計測する。窯の平面形がいわゆる扇状を呈するもので一番新しい形態をもつものである。2号窯は焚口の一部は欠損破壊されて、全長10m、焼成室3室、窯尻と周溝・覆屋等の柱穴が検出されている。窯の平面形は1号窯と同じ形態をとる。

これと同類の形を取るものには、小石原の一本杉・須恵町の須恵焼新窯・福岡市の高取系の能古窯がそれで、基本形は焚口が狭く、後に行くほど広くなり、平面形は扇形を呈するもので、一般的に磁器を中心に焼いていたもので、これには陶器も焼成できる。

窯の平面形と形態から、高取系の窯の構造では、次の様に実証されている。割竹式→階段状連房式→扇形（平面形）階段状連房ということになる。

平成4年（1992）に刊行された『福岡県史』の中で「筑前高取焼」（註15）である。これは昭和62年に福岡市美術館で企画された『筑前国陶高取焼展』のものが中心である。

また、平成13年（2001）小石原焼陶器協同組合が実施した『小石原 やきものの歩み展』や、赤池町が実施した上野焼400年祭を記念した展覧会図録が平成14年に刊行されている。『国焼茶陶 上野焼展』北九州市小倉の井筒屋デパートで開催されたものである。

そして平成17年（2005）の福岡市美術館で『大名茶陶 高取焼展』（註16）につながってくる。

また、直方市では、平成17年（2005）に「高取焼400年祭」の準備委員会を立ち上げ、8月には直方市長を実行委員長として「高取焼400年祭」実行委員会が成立して、翌年に向けて活動を開始された。高取焼開窯400年前年祭として『古高取宅間・内ヶ磯窯展』（註17）が10月に直方谷尾美術館で開催された。主催者は古高取を顕彰する会であった。成功裏に終了した。

平成18年（2005）には、実行委員会がフル回転し、メインにマイ茶碗を用いての茶会に参加という形式で『千人茶会』を10月8日（日）に直方いこいの村体育館で実施することとなった。マイ茶碗を造る作業は、当人がやり、調整し釉薬を掛けて焼く作業は実行委員会という分担で、民間の力が結集した結果1,917個が焼かれた。他の事業として、『高取焼展－出土品が語る筑前陶器のはじまり－』がアートスペース谷尾で、『高取焼現代作家展』を直方谷尾美術館で、そして、『高取焼に関するシンポジウム・講演会』をユメニティのおがた（大ホール）で実施した。

これらの『高取焼開窯400年祭』は順調に終了を見た。今後いかに顕彰して継続するかが問題である。

近世陶器の展覧会は、飯塚市歴史資料館で10月に『九州の茶陶展』（註18）を開館25周年記念とし実施している総数

註14

志満紀男編
『田香焼窯跡』
大任町文化財調査報告書
1996年 大任町教育委員会
に詳細に述べてある。

註15

福岡県編
『福岡県史』
文化史料編
「筑前高取焼」40 1992年
西日本文化協会

註16

尾崎直人編
『大名茶陶 高取焼展』
福岡市立美術館 2005年の
特別展図録

註17

古高取を顕彰する会編
『古高取宅間・内ヶ磯窯跡展』
（図録）2005年で前年祭と
して直方谷尾美術館で開催

註18

飯塚市歴史博物館編
『九州の茶陶展』
2006年（図録）
開館二十五周年展として

100点の内に高取・上野系で15点が展示されていた。甘木歴史資料館でも同月に『筑前秋月藩窯展』(註19)を展覧している。また、筑後の星野村古陶「星野焼展示館」では『筑後のやきもの展Ⅱ－星野焼周辺の高諸窯をめぐって－』を実施されている。

その地域に沿った“やきもの”は庶民の眼にどう映るのでしょうか。肌のぬくもりとあたたかさを!!

学術的なものとしては、東洋陶磁学会の第27回大会(2000)で『上野・高取』(註20)に焦点をあてて発表された。

また、九州近世陶磁学会では、「10周年記念」として『九州陶磁の編年』(註21)を平成12年(2000)に、五年後には『16・17世紀における九州陶磁をめぐる技術交流』(註22)ということで、その中に「福岡県陶器の技術」として発表されている。技術的な裏付けや影響については道半ばの観がある。今後は一点・一点それぞれの、胎土や焼成等の詳細なる吟味が必要となってくるし、細い観察力が必要である。また、畿内の消費地としての遺跡の調査から古高取が検出されていることは商的交流が展望されてくる。

(3)

本論を見てみると、筑前の茶陶高取焼の流れや系譜(註23)を発掘調査の報告書で追うことができたわけで、すなわち永満寺宅間窯－内ヶ磯－山田窯－白旗山窯－小石原鼓－(小石原中野)－東皿山－西皿山という様に、ただ東皿山の実態は発掘調査では捉えることができていないのが残念であるが、大約のことは西皿山の発掘状況で理解できる。それに付随しての、上畑・千石・能古・須恵焼等の実態も整理でき、研究が一步上の段階に昇華できる点まできたことが見受けられる。今後の研究に期待がもたれるのが、小石原窯跡群の調査研究である。また、筑後国の陶磁にも、詳細なる実態把握のための発掘調査の実施を行ない、一つ一つの窯跡の状況把握が必要で整理作業等の早急な動きが待たれる。

近年、広域化が進む市町村の合併による、文化行政や文化財行政にどう影響をあたえるかということになり、今後に必要な問題が発生することになってくる。

福岡県には、筑前国・筑後国・豊前国の三国四藩があり、それぞれに江戸時代には、“国焼(くにやき)”と称するやきものが焼かれていたことを忘れてはならない。県下においても近世古窯跡をまとめて展示できる場所の提供が、行政にとって必要な課題となってきている。また、その責務をはたす時期が今日ではないのだろうか。

この直方市は筑前国焼高取焼が生まれた永満寺宅間と内ヶ磯が立地する場所であることを肝に銘ずることが必要である。

2006年11月末了

註19

甘木歴史資料館
『筑前秋月藩窯展』
2006年「温故44号」に詳細に説明されている。

註20

東洋陶磁学会
『東洋陶磁』第三十号
「上野・高取」を学術的に東洋陶磁学会として研究集会在福岡市で実施された。

註21

九州近世陶磁器の研究するため学会を組織したのが1990年で肥前陶磁器を中心として各県の国焼にテーマを求めた。高取・上野・小石原についてのテーマによって次の様なものがある。
九州近世陶磁学会編
『九州陶磁の編年』
2000年 小石原・高取の編年を出している。

註22

九州近世陶磁学会編
『十六・十七世紀における九州陶磁をめぐる技術交流』
2005年で「福岡県陶器の技術」として高取焼を中心として発表されている。

註23

高取焼の系譜については、貝原益軒編『筑前国続風土記』の巻之29 土産考上 器用類を中心におきたい。黒田藩の公的な文書であるため。

